
不死者王には効かない（ブラムス×シルメリア、J・D・ウォルス）

流瑠子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死者王には効かない（ブラムス×シルメリア、J・D・ウォルス）

【Nコード】

N3643B

【作者名】

流瑠子

【あらすじ】

この小説を書こうと思ったきっかけは、2ちゃんのブラムス氏を語るスレより。ブラシルSS第二弾！

かつて戦乙女に封印された、
天空城に住まう美しい魔女、J・D・ウォルス。

彼女はご機嫌で、見事な刺繍の入った、

白いレースのカーテンに四方を囲まれた豪華なベッドに横たわり、
つい先程手に入れたばかりの、

左手の薬指に嵌められた美しい指輪を眺めていた。

つい先程までの、指輪の所持者に想いを馳せていると、

カーテンに何者かの影が映る。

シルエツトで、彼女が待っていた相手だと分かった。

「あら？ブラムスさま。お待ちしていたわ」

それは、ウォルスを含む不死者の頂点に君臨する王、ブラムスである。

「ウォルスよ。私に言う事は無いのか？」

ウォルスはその問い掛けを無視した。

「お話するのに、カーテンは邪魔よネ」

ウォルスが真っ赤な指先を振ると、閉じられていたカーテンがさつと開く。

ブラムスは、素肌がかすかに透けて見える布を、

一枚纏っただけのJ・D・ウォルスを見て、軽く眉をひそめた。

「…指輪は、どこにある？」

「知りたいなら、もつと近くへいらして」

仕方なくブラムスはウォルスの示す場所、ベッドの端に腰かけた。

ギシッとベッドが軋む音がした。

ウォルスは上半身を起こすとブラムスの手をとった。

「ああ…わたくしが、今、どのような気持ちがお分かりになって？」

ブラムスは、彼女の手をあつさりと払った。

「指輪は」

ブラムスが言うと、ウォルスは左手を見せた。

「ここにありますわ。ホラ、わたくしの指にピッタリ」

ブラムスは呆れたように、うつとりと指輪を眺めるウォルスを見た。

「お前の為の物ではない」

「フフツだとしても、わたくし、この指輪がとても気に入りましたの。

そう簡単に渡せませんわ」

「何が望みだ」

するとウォルスは、ねだるように彼にしな垂れかかる。

しかし、ブラムスは微動だにしない。

訝しんで目を開けると、氷のようなブラムスの視線に、流石のウォルスも、これ以上彼を留めるのは無理だと悟る。

「…相も変わらずお堅いこと」

しぶしぶ、自らの指に嵌めた指輪を外し、彼に渡した。

「あなたの女神サマは見えてないのに、

こんな美貌の持ち主の誘いになびかないなんて、オトコとしてどうかしら？」

大袈裟に息を吐くウォルスを尻目に、ブラムスはさっさと姿を消した。

「どうしてこのわたくしを…？失礼ね！」

ウォルスが、そして数多の女不死者が求める不死者王の寵愛を、一身に受ける女神。

かつてウォルスを封印した忌ま忌ましいノルン三姉妹。

蒼穹色の鎧をまとう戦乙女。金髪の末妹。

「フンッ覚えてなさい！王を必ず、私の虜にしてやる！」

ブラムスは、ブラムス城に着いたところで、シルメリアに会った。
「ブラムス…」

シルメリアが立っている門は、

彼女はもちろん、彼女の姉アーリイや、レナスも通った事がある。

「シルメリア？」

ブラムスが呟くと、シルメリアは頼りなげに近付いて、顔をブラムスの胸に埋めた。

出来る事なら始終彼の側にいたかったが、そうもいかない。

「探した」

「…そうか」

「どこへ行っていた？」

ブラムスの服を掴む力が強くなった。ブラムスは顔をひどくしかめた。

「思い出したくもないな」

金髪を梳くように撫でてやると、

シルメリアは不安げに、探るようにブラムスを見つめる。

彼の愛を疑っているわけではない。

深い愛を受けているのが分かる故に、何かのきっかけで、

例えば自分と離れている間に途切れてしまったらと思うと怖い。

「わかった。言いたくないならいいわ」

するとブラムスは、シルメリアの気持ちを看透かしているかのように言う。

「案ずる事はない。…私にとっては、お前が全てに違い無い」

晶石に捕われていたこの女神をかつて、見つめ続けた。

「手を借りるぞ」

「あ…」

何か言う隙を与えず、シルメリアの、左手の薬指に指輪を嵌めた。

「私に分かる事はこれだけだ」

シルメリアは、ぼんやりと左手の薬指に嵌められた指輪を見つめる。

やや硬かった表情が変化して、案とと、幸せの笑みがこぼれた。

「貴方からの贈り物：これほど嬉しい物は無い」

シルメリアはかすかに頬を染め、指輪にそつと口づけた。

(後書き)

このSSも、2ちゃんのスレに投下

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643b/>

不死者王には効かない（ブルムス×シルメリア、J・D・ウォルス）

2010年10月14日18時41分発行